

展望

郷土への愛

鈴木 竹志

『伊藤一彦自選歌集——宮崎に生きる——』

が出された。長く伊藤一彦の歌を読んできた私にとつては、実に嬉しい一冊である。既刊の十五冊の歌集のそれぞれから、伊藤自身が選んだ歌が載せられている。その歌数は、七八三首。既刊歌集の歌の総数が六〇六三首だから、一割強の歌が収められていることになる。また略年譜、初句索引も掲載されている。さらに、俵万智、大口玲子による「伊藤一彦への質問」も掲載されているという具合だから、とにかく至れり尽くせりというほかない。今回、一つの区切りとしてこの歌集を編んだ伊藤一彦にとって一番大切なことは、何なのだろうかと考えてみたのだが、やはりこの歌集の副題とされている「宮崎に生きる」に尽きるであろう。伊藤は早稲田の学生時代を除いては、故郷宮崎の地を離れることは一度もなかった。宮崎の地で営々と短歌を詠み続けてきている。さらに現代短歌・南の会の中心メンバーの一人として運営に携わり、機関誌「梁」の編集長も務めている。また「牧水研究会」の中心になり、「牧水研究」を刊行し

続けている。「若山牧水賞」の運営にも深く

関わってきたことは周知の事実である。また若山牧水賞関連では、今年『伊藤一彦が聞く牧水賞歌人の世界』（青磁社）も出されている。

宮崎という土地への深い愛着が、伊藤の活動の原点に常に置かれていることは間違いない。

伊藤は宮崎の人と自然を愛してやまないのがある。だから、伊藤の短歌に詠まれている宮崎讃歌という側面はかなり重要な点であることは、伊藤の歌を読んでゆく場合、踏まえておく必要がある。もちろんこのことはこの自選歌集を読んでゆく中で確認することができ。例えば二〇一七年に出された『遠音よし遠見よし』からは、次の歌が選ばれている。

陸もまた海のものにてひざまづくとき
鳥あり夕陽浴びつつ

日向灘なり
百重波千重波しきに億年の手帖をひらく

雨のなかジャラカンダの森に全身を濡らし入りゆく結願のごと

宮崎の海や鳥、あるいは森を詠んだ宮崎讃歌である。

ところで、私は、二十代後半に、伊藤の第二歌集『月抄抄』について、小論を書いたことがあるが、そこに取り上げた何首かの歌が、この自選歌集にも入れられていて、非常に嬉しく思った。例えばこんな歌である。

昼ながら灯を消しがたきわが家に入りき
て暴るるつばくらめかな

輪廻とはいかなることや灯を消ししものち
一家にて聴く青葉木菟

動物園に行くたび思い深まれる鶴は怒り
ているにあらざるや

これらの歌を初めて読んでから四十年以上経つが、それでも、当時と同じ感懐を抱くことができる。まさに歌の力ではないかと思ふ。伊藤のこれらの歌には、鳥が詠まれているのだが、今こうしてこの三首を読んでみて、その当時は全く気づかなかつたのだが、実はこれらの歌は、鳥という存在の力を借りて、家族の今を詠もうとしていたのだと気づいた。ならばと、自選の歌を見直してみると、他にも鳥を詠みつつ家族を詠んでいる歌をすぐに見つけることができた。

鶺鴒の声は透りておさなきを守る長子の
傷つきやすし

自選歌集を読みながら、新たな発見ができ
たことは嬉しくてならない。